

【事例紹介】

鳥取県を学びの場とする
鳥取フィールドスクール事業
-地域と鳥取大学の交流-

Field School Project in Tottori:
Exchange between Tottori University and the Local Community

鳥取大学学生部国際交流課長 宮田 育征

MIYATA Yasuyuki

(Manager, International Affairs Division, Department of Student Affairs,
Tottori University)

キーワード：智頭町、地域交流、多文化共生

1. はじめに

鳥取県では、県内の高等教育機関（4 機関）と地方自治体やNPO等関係機関で、県内の留学生の円滑な受入れと地域社会と連携した国際交流活動の推進を図るため、「鳥取県留学生交流推進会議」（以下、「推進会議」という。）が組織され、2011年から活動をしている。この組織の中で、受け入れている留学生数が最も多い鳥取大学は、この推進会議の事務連絡機関としての役割を果たしている。推進会議の主な活動は、年一回の総会で各機関との情報交換を行うことであるが、主要な留学生交流事業の一環として「鳥取県を学びの場とする鳥取フィールドスクール事業（以下、「フィールドスクール事業」という。）」に取り組んでおり、この事業は、2011年度から独立行政法人日本学生支援機構の留学生地域交流事業として公益財団法人中島記念国際交流財団の助成を受けて実施している。

本稿では、第2節で、事業内容と活動状況（①智頭町での田植え、②智頭町での稲刈り、③しゃんしゃん傘踊り）、第3節でこのフィールドスクール事業の生い立ち、第4節で、こうした留学生と地域との交流の取り組みを支える、鳥取大学における学生交流組織“G-Frenz”（ジーフrenz）の取り組みを紹介する。

2. 鳥取県を学びの場とする鳥取フィールドスクール事業

現在の「鳥取県を学びの場とする鳥取フィールドスクール事業」になるまでには、事業内容が幾度か見直しされた。その詳細は省略するが、「多文化共生コミュニティづくりへ」「留学生による農繁期農作業ボランティア」「鳥取県智頭（ちず）町の休耕田で世界の被災地を救うための支援活動」と、活動の名称並びに事業内容を変えながら、2015年度から現在の事業名となり、今年で4年目を迎えている。

2-1. 事業内容と活動状況

事業の内容については、①智頭町での田植え、②智頭町での稲刈り、③しゃんしゃん傘踊りである。

①および②については、後ほど説明するがアフリカ・ケニアのマトマイニ・チルドレンズ・ホーム（希望の家）という施設へお米を送る活動である。事業内容と活動状況は以下のとおりである。

①智頭町での田植え：5月の下旬に行う田植えについては、鳥取大学から毎年30-40名の留学生、日本人学生、教職員と計60名程度が参加している。これに地元の高校生、小学生、地域の住民の方などが加わり100名程度で田植えを行う。初めて田植えをする方がほとんどのため、作業の前に、地元の方から植え方について説明があり、その後、参加者は通常のお米ともち米2箇所分の田んぼに裸足で入り、田植えをする。この時、参加者は一列になって、掛け声に合わせて苗を植えていくのである。田植え機などの機械は一切使用せずに、1,200㎡の田んぼに手植えで苗を丁寧に植えていき、作業は2時間程度で終わる。

田植え作業が終わった後、智頭町の地元の方々が準備してくれた臼、杵を使って餅つきを体験する。地元の方々の掛け声により餅つきがスタートするが、参加する留学生たちは、初めのうちは呼吸が合わずに、杵と杵がぶつかる。しかし、だんだんとリズムカルに上手につけるようになり、留学生達がついたお餅は、あんこ、きな粉、大根おろしなどをまぶし、地元のお料理とともに振舞われ、地域住民の方々、高校生、大学生、留学生による交流会が始まる。自己紹介、クイズと、楽しい時間を過ごすことになる。以上が恒例の活動内容である。

今年から県内の高等教育機関に参加の声かけをしたところ、公立鳥取環境大学から12名の留学生の参加があった。その結果、2018年5月26日の田植えに



手作業で頑張りました

は、推進会議として約60名が参加し、地元の方と合わせて総勢100名を超える人が田植えに参加し、盛会のうちに終わることができた。

②智頭町の稲刈り：二つ目の事業は、秋に行う稲刈りである。9月下旬に行うため、留学生の参加が少なくなる。これは、8月下旬から9月下旬に在籍期間が満了する留学生がいるため、修学を終えた留学生が自分の国に戻ることや、本学が夏休み期間中となるため、多くの学生が他の行事に参加するためである。それでも、本学からは30名程度の参加があり、なれない手つきで、鎌を持ち、汗をかきながら黄金色をした稲穂を刈るのである。1,200㎡の田んぼがすべて土色になれば作業は終わりとなり、その後は、田植えと同じように餅つきをして交流会で幕を閉じる。



稲刈りの様子

これら二つの事業は、智頭町のコントリビューションの会が中心となり、推進会議は連携、参加させていただき、留学生と地域住民等と交流活動を行っている。参加した留学生は、初めての田植えや稲刈りに戸惑いながらも、作業を終えた時の達成感を味わい、餅つきなどで地元の方との交流を楽しむことができたこと、参加アンケートでも高い満足度を示している。また地元の方々は、留学生たちを大歓迎し、この交流会を楽しみにしている。

③しゃんしゃん傘踊り：最後に紹介する活動は、鳥取市が主催している「しゃんしゃん祭り」への参加である。このお祭りは、鳥取県東部地方に古くから伝わる「因幡の傘踊り」を誰でも簡単に踊れるようにアレンジされたもので、鳥取市最大のお祭りとして知られている。2014年の第50回記念大会の「鳥取しゃんしゃん祭」では、4千人以上という世界最大の参加者を誇る傘踊りとして世界ギネス記録を達成した。

毎年8月14日に行われる「鳥取しゃんしゃん祭り」の傘踊りには、本学の留学生の約1/4が参加しており、留学生にとっては日本滞在中の大きな地域の伝統行事体験となっている。また、異なる出身国の留学生同士や日本人学生、そして地域の方々と交流できる良い機会となっている。本学は、チーム名「鳥取大学 International 踊り子隊」としてお揃いの浴衣と草履姿で踊るが、その姿からも鳥取大学の留学生が地域の行事に参加していることを地域の皆さんに知っていただくいい機会となっている。

このお祭りの本番で踊る時間は2時間程度だが、参加学生達は事前に傘を上手に扱うための練習を重ねなければならず、練習は1日2時間、15-16回行い、練習時間の合計は30時間以上に及び、ハードなものとなっている。その間にも、踊りをマスターしているかの試験もあり、場合によっては不合格となり傘踊りに参加できなくなることもある。こうした厳しい練習をした後、祭りの本番で、チーム一丸となって踊り終えた



まだまだ余裕

ときの達成感は何とも言えないようで、留学生にはたいへん人気がある行事であり、夏休み期間中の開催にもかかわらず40-50名の留学生を含め

表1 公益財団法人中島記念交流財団助成にかかる鳥取県を学びの場とする鳥取フィールドスクール事業の実施状況(平成27年度以降)

た学生が毎年参加している。

以上のとおり、3つの事業にこれまで留学生を中心に学生、教職員等が参加してきた。その参加者数は、2015年度以降は、表1のとおり700名を超えているが、この中には、地域の方や、高校生などが含まれている。2014年度以前に行った事業への参加者数は1200名を超えている。

年度	活動内容	外国人留学生	地域住民・企業等	その他	合計
平成27年度	①5月24日 智頭町「ケニアにお米を送る」田植作業	24	30	5	59
	②8月14日 鳥取市 鳥取しゃんしゃん一斉傘踊り	30	10	9	49
	②9月26日 智頭町「ケニアにお米を送る」稲刈り作業	16	50	8	74
	小計	70	90	22	182
平成28年度	①5月28日 智頭町「ケニアにお米を送る」田植作業	32	30	29	91
	②8月14日 鳥取市 鳥取しゃんしゃん一斉傘踊り	33	10	10	53
	②9月22日 智頭町「ケニアにお米を送る」稲刈り作業	12	30	11	53
	小計	77	70	50	197
平成29年度	①5月27日 智頭町「ケニアにお米を送る」田植作業	34	31	36	101
	②8月14日 鳥取市 鳥取しゃんしゃん一斉傘踊り	29	3	14	46
	②9月23日 智頭町「ケニアにお米を送る」稲刈り作業	18	25	25	68
	小計	81	59	75	215
平成30年度	①5月26日 智頭町「ケニアにお米を送る」田植作業	33	35	40	108
	②8月14日 鳥取市 鳥取しゃんしゃん一斉傘踊り				
	②9月中旬 智頭町「ケニアにお米を送る」稲刈り作業				
	小計	33	35	40	108
		261	254	187	702

※平成30年度については、実施済みの事業を記載

3. 智頭米をアフリカへ送る：フィールドスクール事業の生い立ち

さて、智頭町で行う田植え、稲刈りが本事業の中心となり、10年以上も前から実施されてきた。なぜ智頭町での活動が中心となったかを次のとおり説明する。

3-1. 智頭町百人委員会と鳥取大学

田植えと稲刈りは鳥取県東部の南に位置し、岡山県と隣接する智頭町で行っている。智頭町では2008年に智頭町百人委員会¹が「食糧難の国にお米を送ることで人の命も助けることがで

¹ 鳥取県八頭郡智頭町で町民が町に町づくりの事業を提案し、予算折衝も行う制度。

きるし、智頭の子どもたちにも国際的な視野や思いやりが育つ」というコンセプトのもと、国際貢献として智頭町で作ったお米を食糧難の地域へ送る計画をたてた。これは、百人委員会の組織「コントリビューションの会」の代表で智頭町の主婦、米本ゆかりさんのアイデアである。収穫したお米をどこに送るのか考えていたところ、以前から交流のあった若良二鳥取大学副学長（当時）に相談した結果、島根県出身でアフリカ・ケニアにあるマトマイニ・チルドレンズ・ホーム（希望の家）という施設を運営している菊本照子さん²を紹介され、この組織を通してケニアを支援先に決めた。

この構想から2年後に町内の休耕田を無償でお借りし、地元の方の理解を得て、子どもやお年寄り、鳥取大学の留学生、さらに近隣地域の協力を得て、2010年5月29日に「アフリカに米を送る」と題し、最初の手植えによる田植えが始まった。地元の農家の方から指導を受けながら、田植えを初めてする小学生や留学生は、戸惑いながらも時間がたつにつれて上手になったと報告されている。この年の秋の収穫には、春と同じように、地元住民、小学生、留学生など大勢で稲刈りを行っている。

3-2. 課題解決に向けて

智頭町での留学生の地域交流は、こうして田植えと稲刈り、そして国際貢献という形で始まったが、すぐに問題が発生した。智頭町が承認した予算の25万円では、収穫したお米を航空機で輸送する経費を賄えないことがわかったのである。「コントリビューションの会」、智頭町、鳥取大学関係者等で何とか輸送費を安く出来ないか、どうすればいいかなど議論した結果、2010年7月に、赴任されたばかりの駐日ケニア共和国大使を智頭町へお迎えして、現地を視察いただくとともに、支援内容を説明して、何とか経費がかからないようお願いした。併せて、最初のお米を自分たちの手で届ける方法も検討し、鳥取県、ロータリークラブなど様々なところに相談した結果、鳥取県国際交流財団から輸送に必要な経費を半額補助していただくことになった。

その結果、2011年1月に、収穫した最初のお米を現地へ智頭町職員、「コントリビューションの会」代表、鳥取大学関係者の計6名がそれぞれ10kg、計60kgのお米を持参し、ケニアのマトマイニ・チルドレンズ・ハウス院長の菊本さんに手渡しすることが出来た。また、現地の子どもたちからの歓迎を受けながら、交流を行うことも出来た。約10名の子どもたちは、「こんなに白いお米は見たことがない」と驚き、ご飯のおいしさにもビックリしていた。訪れた6名は、日本では当たり前のことが、世界ではそうでない所があると痛感し、智頭米を毎年届けたいと切に思ったのである。

お米の輸送の問題は、関係する様々な機関の努力と協力で解決できたが、こうして関係機関が問題解決に向けて考え、気持ちを一つにしたことが、今日までの活動につながっている。

² 長年にわたりケニア共和国のストリートチルドレンの救済のため、保護教育と生活自立支援に貢献したとして、2007年吉川英治文化賞受賞。島根県出身。

4. 留学生と交流する学生団体“G-Frenz”³

さて、本事業を実施するには、大学の教職員だけでは成功しない。留学生だけでもそれは難しく、鳥取大学国際交流センターでは、2015年後期から国際交流のための学生グループの組織作りを試行し、2016年4月に「国際交流のための学生チーム“G-Frenz”」を結成した。G-frenzは、国際交流センターが実施する国際交流にかかわる業務の支援をするだけでなく、鳥取県等外部団体からの依頼があった場合に、学生自ら企画・運営してプログラムを実施している。表2は、2017年度にG-Frenzがかかわった主だった活動記録である。

このように、現在、G-Frenzは、国際交流センター、国際交流課教職員と協働して、様々なプログラムを学生目線で担当しているが、こうした学生の国際交流への主体的な参画を促す取り組みは、参加している学生個々人の教育効果も徐々に認められること、また周囲の学生への良い意味で刺激となる等の波及効果があることから、今後も本学の国際交流の1つの柱として、学生の主体的な参画による交流の場づくりを推進していく必要がある。

表2：G-Frenzが関わった国際交流活動（2017年度）

プログラム名（主催）	交流団体	実施日	G-Frenzの役割
エネルギー環境プログラム（本学）	オーストラリア・アデレード大学生（15名）	4月10日	日本語サポート
グローバル社会における多文化共生のための協働力育成プログラム（本学）	台湾・韓国・メキシコからの留学生（30名）	6月26日～ 7月14日	日本語サポート コミュニティカフェの企画・開催
台湾・香港の大学生インターンシッププログラム（鳥取県）	台湾・香港の留学生（30名）	7月4日	G-Frenz 25名参加
香港青少年交流事業（鳥取県）	香港の大学生（17名）	11月8日	G-Frenz 22名参加
体験学習：鳥取大学訪問（八頭高校）	高校生15名	11月13日	G-frenz 7名参加
留学生を囲む会	本学留学生	12月8日	G-Frenz 27名参加
海外での鳥取大学紹介	現地学生	2月下旬～ 3月上旬（4日）	G-frenz 13名参加

表2以外にもG-Frenzのメンバーは、本学へ入学した留学生を市役所、郵便局などに引率して、住民登録、国民健康保険への加入、口座の開設などの受入れサポートに積極的に参加している。この4月には約45名の新規留学生をサポートするため、公共交通機関を利用するなどして留学生を引率し、

³ Global Friends：学生の主体的参画の促進をめざし、2015年後期に結成。国際交流を主とする多種多様な業務に積極的に参加している。

手続きしてきた。

また、第2節で紹介した「鳥取しゃんしゃん祭り」にも、多くのG-Frenzが参加し踊りをサポートしている。さらに、2018年2月、3月には中国、マレーシア、ベトナムで鳥取大学フェアを開催し、G-Frenzのメンバー13名が他の学生と参加し、鳥取大学での教育・研究活動、生活状況などを現地の多くの学生の前で発表した。この活動が、本学に興味をもち、留学したい学生が少しでも増えることに繋がることを期待している。

G-Frenzは、発足当時は日本人学生が多かったが、現在では留学生の方が日本人学生の数を上回り、本年度は総勢で約50名と過去最大になっており、彼らを指導する国際交流センターの教員はうれしい悲鳴をあげている。

5. 今後の取り組み

2018年2月に開催された推進会議では、フィールドスクール事業に対して、本学を除く3つの高等教育機関にも事業実施の際に案内をすることが承認された。推進会議自体が、年1回の開催であり、各団体の活動状況報告が中心となり、会議自体が少し停滞していたこともあり、推進会議会員の脱退も加わる中、久しぶりに期待がもてることになった。

おかげで、今年の田植えには公立鳥取環境大学の留学生が参加したように、鳥取大学以外の高等教育機関にも本事業の素晴らしさをお伝えし、多種多様な方の参加者が増えることを期待している。このことが、他の事業での連携の橋渡しとなることを願っている。

智頭町「コントリビューションの会」が主催する田植えと稲刈りには、今後も引き続き、留学生、日本人学生を参加させたいと考えている。小さな地域が取り組んでいる“アフリカに米を送る”この事業は、地域との交流にとどまらず、世界的な視野に立つ活動になっていることを意識しながら、当たり前のようにお米を食べている私たちがいかに幸福かを考えさせられる事業、それに関与したいと思う人材を少しでも増やしたいと思っている。

また、参加した学生には、智頭町の地元の方が、交流の機会を提供するだけでなく、田植え、稲刈りをするまでの準備を一手に引き受けていることも実感してほしい。智頭町の皆様には参加する推進会議の一員として、深く御礼申し上げます。

しゃんしゃん傘踊りでは、留学生の鳥取滞在中の伝統行事体験となることから、引き続き参加する。昨年度のお祭りでは、すでに帰国した留学生が、この祭りに参加するために来日するなど、鳥取での体験がよい思い出になっていることを物語る出来事もあった。今後は、卒業生、修了生に対する広報活動として現況をより強くお伝えする。

このフィールドスクール事業は、すでに4年目を迎えたため、充実期に入っている。しかしながら、今一度智頭町の方と今後も連携できる場を積極的に設け、今後の交流がより推進できるように事業を

改善したいと考える。

最後になったが、本事業へ支援をいただいている、独立行政法人日本学生支援機構および公益財団法人中島記念国際交流財団には、この場をお借りして御礼申し上げる次第である。